

# 日本活断層学会 2024 年度秋季学術大会開催報告

日本活断層学会 2024 年度秋季学術大会実行委員会

日本活断層学会 2024 年度秋季学術大会を、長野市西長野の信州大学長野（教育）キャンパスにて開催した（主催：日本活断層学会、後援：フォッサマグナミュージアム）。11月2日（土）午後と3日（日）午前の一般研究発表には249名（会員143名、非会員72名、学生34名）に参加いただいた。2日（土）午後にはポスター発表コアタイムを行った。続いて、76名（会員45名、非会員5名、学生21名、招待5名）に参加いただき同会場にて学術交流会を開催した。3日（日）の午前には一般研究発表と中高生ポスターセッションを行った。その後2024年度日本活断層学会表彰式を執り行った。3日（日）午後には一般の方を含む約130名の方に参加いただき、一般公開シンポジウム「令和6年能登半島地震から考える大地の動き」を開催した。4日（月・祝）には40名（会員23名、非会員5名、学生12名）の有志で巡検「糸静線北部、神城断層地震とフォッサマグナ」を実施した。今回、ポスター会場では企業展示とキャリア懇談会を初めて開催し、7つの企業・機関と若手研究者や多くの学生が参加した。



2日（土）13:00に堤 浩之会長による開会の挨拶が行われ、3日（日）午前の部とあわせて12件の口頭発表、32件のポスター発表が行われた。それ以外に、今年度はポスター発表に中高生の参加が5件あったほか、企業展示が7件、ブース展示が2件あった。口頭発表では、地形、地質、物理探査などの多様な観点から研究成果が紹介された。ポスター発表では会場をうめる多くの参加者により、活発な議論が行われた。ポスター発表コアタイムの後の学術交流会では、廣内大助大会実行委員長の挨拶に続いて、中田 高先生（広島大学名誉教授）より乾杯の発声を受け、歓談は大いに盛り上がりを見せた。最後には、2025年度大会実行委員会から石村大輔会員の挨拶、2024年度大会実行委員会から安江健一委員の締めで散会した。

3日（日）の一般研究発表終了後には、学会賞と論文賞の表彰式が開かれ、堤 浩之会長による表彰が行われた。その後、遠田晋次副会長の挨拶をもって秋季学術大会を閉会した。

2024年度の学会賞・論文賞ならびに若手優秀講演賞は次の通りである。

○学会賞（敬称略）

熊本県

熊本地震・平田震災遺構保存会

○論文賞（敬称略）

相山光太郎・福地 亮・林崎 涼・加藤和浩・金折裕司「山口県北東部、大原湖一弥畝山西断層系に属する長門峡断層の活動性」（活断層研究 56号掲載）

田力正好・越後智雄「十日町断層帯と長野盆地西縁断層帯の境界部に発達する活断層群の認定とそのテクトニックな意義」（活断層研究 56号掲載）

○若手優秀講演賞（敬称略）

中村義也「山体重力変形の主要発達要因と断層の分布が与える影響」（共著者：石村大輔）

渡邊和輝「熊本県西原村河原団地トレンチにおける副断層の構造解析」（共著者：小俣雅志・渋谷典幸・谷口 薫・杉本 惇・足達健人）

瀬能正太郎「敦賀断層の断層岩中に含まれる粒子の三次元配列」（共著者：澤田 渚・立石 良・島田耕

史・岩森暁如・小川昌也)

澤田 渚「帯磁率異方性を用いた活断層の運動像推定の可能性」(共著者：立石 良・川崎一雄・瀬能正太郎・島田耕史・岩森暁如・小川昌也)

3日(日)午後には、シンポジウム「令和6年能登半島地震から考える大地の動き」が一般公開で行われた。堤 浩之会長の開催挨拶の後、大会実行委員の安江健一氏による趣旨説明がなされた。その後、以下7件の講演が行われた(敬称略)。講演の後、小長井一男副会長による挨拶をもってシンポジウムを閉じた。

小林知勝(国土地理院)「人工衛星から視る令和6年能登半島地震の地殻変動と断層運動」

石山達也(東京大学)「令和6年能登半島地震震源域周辺の地殻構造と断層構造」

塚脇真二(金沢大学)「令和6年能登半島地震における岩体の崩壊ならびに海底の隆起にともなう地形変化」

宍倉正展(産業技術総合研究所)「能登半島地震における海岸の隆起と低位段丘の分布との関係」

立石 良(富山大学)「令和6年能登半島地震に伴う海岸隆起と海底変状」

白濱吉起(東京大学)「能登半島北部谷底平野に現れた背斜状の地表変状」

呉 修一(富山県立大学)「令和6年能登半島地震における富山沿岸部での津波と住民避難の調査報告」

4日(月・祝)には巡検「糸静線北部、神城断層地震とフォッサマグナ」が行われた。巡検については、文末に掲載の参加者からの報告をもって開催報告とする。

本大会では、多くの方々にご協力を賜り、滞りなく実施することができた。信州大学には会場を提供いただいた。戸隠地質化石博物館や野尻湖ナウマンゾウ博物館にポスター展示をいただいたほか、長野県内外の中高生によるポスター発表や企業展示が加わり大変な盛況となり心よりお礼申し上げます。

最後に、後援のフォッサマグナミュージアムや(公財)ながの観光コンベンションビューロー、シンポジウム講演者のみなさま、学会事務局、関係委員会のみなさま、アルバイトを引き受けて頂いた信州大学の学生のみなさまには大会開催・運営にお力添えを賜りました。深く感謝を申し上げます。

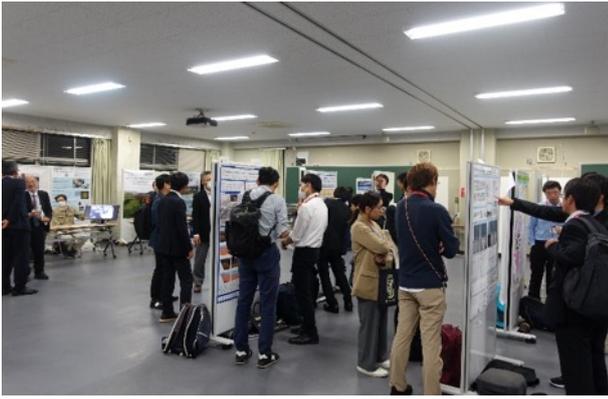
## 写真で振り返る 2024 年度活断層学会秋季学術大会



1) 開会あいさつ(堤 浩之会長)



2) 一般研究発表・口頭発表



3) 一般研究発表・ポスター発表



4) 学術交流会乾杯挨拶 (中田 高広島大学名誉教授)



5) 表彰式・学会賞の表彰



6) 表彰式・論文賞の表彰



7) 若手優秀講演賞受賞者



8) 閉会挨拶 (遠田晋次副会長)



9) シンポジウム・趣旨説明 (安江健一会員)



10) シンポジウム閉会挨拶 (小長井一男副会長)

## 巡検参加報告

岡山大学大学院生 白銀美里

2024年度秋季学術大会最終日の11月4日に、香取拓馬(フォッサマグナミュージアム)、杉戸信彦(法政大学)、松多信尚(岡山大学)の各氏の案内で「糸静線北部、神城断層地震とフォッサマグナ」と題した巡検が行われた。



[Stop1] 写真より奥の扇状地によって谷が閉塞された。山の向かいが上盤側(撮影:副田宜男氏)

8:00にJR長野駅を出発し、県道31号を西走して白馬村へ向かった。午前中は、2014年11月22日に発生した長野県神城断層地震により出現した地表断層の観察地点を巡った。堀之内地区(Stop1)では、東側隆起の撓曲崖を観察した。本地区は、天狗岳付近からの大規模な扇状地によって谷が閉塞され湖沼が形成されたとされ、上盤側の基盤(鮮新統~更新統の堆積岩)とその上にのる湖成堆積物、そして下盤側の基盤(先第三系)という3つの地質から成っている。断層境界を挟んだ地震被害の程度

は、もとより上盤側の方が大きいとされているが、本地区における上盤側の集落は堆積層の上であったために、より被害が大きかった。次の塩島(Stop2)では、白馬村の天然記念物に指定されている塩島地表地震断層を観察した。本断層は、横ずれ変位を伴っているように見えるが、短縮変形による見かけ上のものだと説明された。神城地表断層は、信州大学の廣内大助先生をはじめとするゼミ生たちによって被災時の写真アーカイブが残されており、説明文と専用のサイトへアクセスできるQRコードが記載された看板が各地に設置されている。現代技術を最大限に活用して災害リスクを後世へ伝えていく、災害伝承のあり方について考えるきっかけとなった。その後、大出(Stop3-4)では、国道148号線側から大出の吊り橋方面へ歩きながら逆向き低断層崖を観察した。本断層は、下流側が隆起しているため下盤側が閉塞され湿地になりやすく、年代試料を得られやすい。ボーリング調査やトレンチ調査の結果をもとに、その地点における地下地質についての説明が行われた。時間は正午頃となり、予定より30分ほど遅れて大出の吊り橋付近で昼食をとった。午後は、国道148号線を北上し、フォッサマグナパークの糸魚川-静岡構造線断層露頭(Stop5)を観察した。はじめに、枕状溶岩の露頭やそこから見える周囲の山を観察し、かつてはこの付近が海底であったことが説明された。そして、遊歩道に沿って歩きながら側面から柱状節理を観察し、最後に1990年に山腹斜面を人工的に掘削して



[Stop5] 枕状溶岩露頭を背後に周囲の山を観察する参加者ら(撮影:副田宜男氏)

出現させた糸魚川-静岡構造線断層露頭を観察した。今回は特別に露頭上を登らせていただき、270Maの変はんれい岩や16Maの安山岩・砂岩、そして破碎帯を実際に触ったりしながらじっくり観察することができた。この地質境界は、人の文化の境界にもなっている。露頭観察後、今年で30周年を迎えたフォッサマグナミュージアム(Stop6)を訪れた。ヒスイをはじめとした様々な鉱物や日本列島の形成過程がわかりやすく展示・紹介されていた。

巡検には、40名が参加し、心地よい秋晴れを感じる中見学をすることができた。50ページを超える豊富な資料と現地における説明や議論から、白馬や糸魚川周辺の活断層や地形の特徴について理解を深めることができた。また、地形は人間社会の文化形成に大きく関わりを持っている事を実感できた。巡検の企画・運営にあたられた案内人や、廣内大助氏・酒井美悠氏（信州大学）をはじめとする大会実行委員の方々に深く御礼を申し上げたい。



飛騨山脈を背景に巡検参加者の集合写真（撮影：副田宜男氏）